王寺町文化財調査報告書　第８集

片岡王寺跡第６次

発掘調査報告書

2008. 3

王寺町教育委員会

片岡王寺跡第6次

発掘調査報告書

序

このたび、王寺町文化財調査報告書第８集を発刊することとなりました。

本書は、2006年度に実施した片岡王寺跡第６次発掘調査の成果をまとめたものです。

片岡王寺は飛鳥時代に創建された古代寺院で、「王寺」という町名の由来となったと考えられる重要な遺跡です。現在、その姿はまったくとどめてはいませんが、伝えられるところでは、塔、金堂、講堂がたちならぶ壮大な伽藍が営まれていたようです。

さいわいなことに、これまでに実施された発掘調査の成果によって、古代の片岡王寺の様子は少しずつ明らかとなってきています。

今後も継続して発掘調査をおこない片岡王寺を復元することは、地域の歴史を理解する上で必要なことと考える次第です。

最後に、発掘調査にご協力いただきました片岡神社をはじめ、文化庁、奈良県教育委員会文化財保存課など、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

王寺町教育委員会
教育長　北　義次

例　言

1．本書は、奈良県北葛城郡王寺町本町２丁目1827番、片岡神社境内において実施した片岡王寺跡第６次発掘調査について報告したものである。

片岡王寺跡は『奈良県遺跡地図』（奈良県教育委員会　1998年）に10-B-5として登載されている。

2．調査は王寺町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体	王寺町教育委員会
教育長	北義次
教育次長	中井康員
社会教育課長	藤山雅章
同係長	白石良文
同主事	岡島永昌（現地調査）
同臨時職員	櫻井恵（現地調査）
調査・整理補助員	古賀萬代（王寺町シルバー人材センター）、濵道孝尚
発掘作業	安西工業株式会社に委託
調査協力・助言	片岡神社、奈良県教育委員会事務局、文化庁、池田博、遠藤慶太、竹原伸仁、辰巳陽一、廣岡孝信、山下隆次

3．本書で使用している座標数値は世界測地系に基づくもので、水準値はＴ.Ｐ.値（東京湾平均海面値）に基づくものである。

4．土層の土色、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖23版』に拠った。

5．図２は、王寺町発行の「王寺町都市計画図（３）」（1/2500　平成16年修正）をもとに作成した。図３は、国土地理院発行の1/25000地形図「信貴山」（平成13年７月１日発行）、「大和高田」（平成14年４月１日発行）及び『奈良県遺跡地図』（平成10年３月）をもとに作成した。

6．出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町教育委員会において保管している。

7．本書の執筆は櫻井恵が、編集は岡島永昌・櫻井がおこなった。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1

第２章　調査の内容 …… 4

挿　図　目　次

図１　王寺町の位置
第１章　はじめに
図２　調査位置図（1/2500）
図３　周辺の遺跡（1/25000）
第２章　調査の内容
図４　中世遺構平面図・土層断面図（1/50）
図５　中世遺構出土遺物実測図（1/4・1/6）
図６　古代遺構平面図（1/50）
図７　ＳＤ01遺物出土状況平面図（1/25）
図８　ＳＤ01出土遺物実測図（1/4）
図９　ＳＤ01出土遺物実測図（1/6）
図10　古代整地土Ａ出土遺物実測図（1/4）
図11　古代整地土Ａ出土遺物実測図（1/6）
図12　中近世整地土・近世遺構出土遺物実測図（1/4・1/6）

写真図版目次

写真図版１
片岡神社境内（東から）
ＳＸ02完掘状況（南西から）
ＳＸ02・07土層断面（北東から）
写真図版２
中世遺構検出状況（北東から）
ＳＫ10遺物出土状況（南から）
ＳＫ18遺物出土状況（北西から）
写真図版３
古代遺構検出状況（北東から）
ＳＤ01検出状況（南から）
南壁土層断面（北東から）
写真図版４
出土遺物
写真図版５
出土遺物
写真図版６
出土遺物
写真図版７
出土遺物

図１　王寺町の位置

第１章　はじめに

１　調査の契機と経過

片岡王寺跡第６次発掘調査は奈良県北葛城郡王寺町本町２丁目1827番に所在する片岡神社においておこなった遺跡範囲確認調査である。片岡王寺跡は、飛鳥時代（７世紀前半）に建立されたと考えられている古代寺院跡である。明治20年（1887）頃まで建物基壇跡や礎石が残っていたことが石田茂作氏、保井芳太郎氏によって報告されており、南から塔、金堂、講堂が直線に並ぶ四天王寺式伽藍と推定されている。片岡王寺の名は法隆寺所蔵の「金堂僧徳聡等造像記」〔甲午年、持統８年（694）〕にしるされており、その存在が確認できる。また、正安４年

図２　調査位置図（１/2500）

(1302) に放光寺の僧審盛が撰述した『放光寺古今縁起』によって往時の片岡王寺の姿を知ることができる。この縁起は衰退した片岡王寺（放光寺）の伽藍の復興を目的とした勧進のために撰述されたもので、中心伽藍のほか回廊、門、経蔵、鐘楼、僧坊、倉など数多くの建物が存在すること、永承元年（1046）の落雷によって金堂、回廊、東大門が炎上焼失し、寺が衰退していることなどがしるされている。また、嘉吉３年（1443）にこの『放光寺古今縁起』を筆写した実誉による奥書には、応安４年（1371）に金堂柱立、応永２年（1395）に東門の柱立上棟をおこなったことなど14世紀後半からの復興の様子が記載されている。

現在、周知の埋蔵文化財包蔵地としての片岡王寺跡は、中心伽藍が存在したと考えられる王寺町立王寺小学校校舎付近を中心とする直径160mの円をその範囲としている。平成16年（2004）、王寺小学校の東側に接する国道168号線拡幅工事に伴う発掘調査を契機として周辺ではこれまでに５次を数える調査が実施されている。これらの調査において片岡王寺の東端を画すると思われる奈良時代の石積みの溝、関連施設とみられる掘立柱穴群が発見されており、片岡王寺の寺域が国道付近にまで広がっていたことが明らかとなってきている。

今回の調査は講堂推定地から北へ約40mの片岡神社境内に東西幅５m、南北長12mの調査区を設定した。平成19年（2007）２月19日に調査を開始。表土および、中近世の遺物を含む整地土層は機械による掘削をおこない、中世遺構を検出。これを調査した後、古代遺構を調査した。さらに古代の遺構面を部分的に掘り下げ、下層での遺物、遺構の有無を確認し、３月17日に調査を終了した。途中、３月10日に地元住民を対象とした現地説明会を実施し、調査成果の報告につとめた。

２　周辺の歴史的環境

片岡王寺跡が所在する王寺町は奈良県の北西部に位置している。町の北端には奈良盆地の河川の水を集めた大和川が蛇行しながら西流し、亀の瀬を経て大阪へと流れ出ている。この大和川は古代においては隋使裴世清が難波津から飛鳥へ赴くために利用したと考えられ、近世には剣先舟、魚梁舟が就航し大阪から奈良盆地への物流の幹線となっていた。

王寺町内の遺跡としては弥生時代後期の住居址と古代の掘立柱建物が検出されている舟戸・西岡遺跡（14）が注目される。大和川を眼下に望む丘陵上に営まれた遺跡で大和川との関係は深いものであろう。また、岩才池北古墳（17）、達磨寺古墳群（18）、畠田古墳（26）などの古墳時代後期～終末の古墳が５基確認されている。なかでも達磨寺（19）に所在する達磨寺３号墳は達磨大師の廟として鎌倉期に墳丘を核とした寺院が成立する特異な古墳である。その達磨寺では、平成14年（2002）には本堂基壇の小石室から石製宝篋印塔、土師質合子、水晶製五輪塔形舎利容器、舎利が出土している。

片岡王寺が創建された飛鳥時代には、大和川、葛下川の流域において古代寺院が多く造営される。大和川北岸の三郷町勢野には７世紀前半に創建された南向きの四天王寺式伽藍配置をもつ平隆寺跡（７）がある。その周辺では瓦を供給した瓦窯も確認されている。大和川南岸の王寺町舟戸、現在の舟戸神社には西安寺跡（15）があり、明治期には境内に礎石や塔心礎もみられ、西向きの法隆寺式伽藍配置の寺院と考えられている。７世紀前半から中世にいたる古瓦が採集されている。王寺町葛下には、礎石、瓦が確認されたという寺院跡（22）がある。香芝市尼寺には尼寺北廃寺（27）、尼寺廃寺南遺跡（28）がある。尼寺北廃寺は発掘調査により、塔、金堂、回廊などが検出され、塔心礎の柱座からは耳環、ガラス玉などの舎利荘厳具が発見されている。７世紀後半に創建された東向きの法隆寺式伽藍配置をもつ寺院である。尼寺廃寺南遺跡は南向きの法隆寺式伽藍配置の寺院である。

古代においては大和川以南の片岡の地は敏達天皇系王族が拠点を置いていた地域と考えられ、香芝市平野にある平野塚穴山古墳（32）は茅渟王の埋葬墓とみられている。現在、片岡王寺は尼寺北廃寺、尼寺廃寺南遺跡とともに敏達天皇系王族によって創建されたとの考えが有力である。

1今池瓦窯　2辻ノ垣内瓦窯跡　3峯ノ阪古墳　4峯ノ阪遺跡　5上ノ御所瓦窯　6勢野茶臼山古墳　7平隆寺跡
8立野城跡　9久度遺跡　10立野遺跡　11久度南遺跡　12神南古墳群　13神南遺跡　14舟戸・西岡遺跡　15西安寺跡
16西安寺瓦窯跡　17岩才池北古墳　18達磨寺古墳群　19達磨寺　20片岡王寺跡　21片丘馬坂陵　22寺院跡？
23香滝・薬井遺跡　24畠田城跡　25片岡城跡　26畠田古墳　27尼寺北廃寺　28尼寺廃寺南遺跡　29尼寺窯
30平野窯跡群　31平野古墳群　32平野塚穴山古墳　33送迎山城跡　34下牧瓦窯跡　35木辻城跡

図3　周辺の遺跡（1/25000）

第２章　調査の内容

１　層　序

層序は上層から近現代整地土、近世整地土、中世整地土Ａ・Ｂ、古代整地土Ａ・Ｂ、地山である。中世整地土Ｂと古代整地土Ａ・Ｂは部分的なものであったが、その他の層は調査区全体に堆積している。

近現代整地土　黄褐色細粒砂～粗粒砂（１）。厚さ30～100cm。片岡神社の境内の整備に用いられた整地土と考えられる。土師器、瓦を含んでいる。

近世整地土　暗灰黄色細粒砂混じりシルト（２）、オリーブ褐色粗粒砂混じりシルト（３）、灰黄褐色粗粒砂混じりシルト（４）からなり、厚さ10～40cmである。この層は土師器、瓦を多く含んでおり、近世の遺構面となっている。３箇所でこの層から掘削された遺構を確認した。近世遺構１はトレンチの南東隅で検出した廃棄土坑である。平面形は確認できないが、深さは70cmあり、近世整地土上面から地山に達するまで掘り込まれている。人力掘削をおこなった埋土（24～27）には遺物が多量に混入しており、古代～近世瓦、土師器、陶器が出土した。特に瓦は古代のものがほとんどである。近世遺構２は調査区の西壁で確認できた遺構である。機械掘削の前におこなった層位の確認のための人力掘削で、古代～近世瓦、土師器、須恵器、瓦器の出土を確認している。

中世整地土Ａ　暗灰黄色シルト（５）、灰黄色シルト（６）、オリーブ褐色シルト混じり細粒砂～粗粒砂（７）、暗灰黄色細粒砂混じりシルト（８・９）からなり、厚さ10～45cmで堆積する。土師器、瓦、炭を含む。この層の上面からの遺構を断面で確認した。

中世整地土Ｂ　調査区南端には灰オリーブ色粘土混じり細粒砂（10）が、北端には灰オリーブ色細粒砂（12）が堆積する。厚さ10～15cmである。土師器、瓦器を含む。検出した中世遺構はこの面から形成されている。

古代整地土Ａ　調査区南端に堆積する灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂（13）、灰オリーブ色細粒砂（14）、オリーブ褐色細粒砂混じりシルト（15）の３層からなる。13からは古代瓦、土師器、須恵器、15からは古代瓦、土師器、黒色土器が出土している。

古代整地土Ｂ　灰オリーブ色粘土（16）、灰色細粒砂混じりシルト（17）が調査区北半に部分的に５～10cmの厚さで堆積する。層内からの遺物の出土はなく、東壁でＳＤ01の肩となっている。東壁断面では16の上面から掘削される掘立柱状の遺構（46～48）が確認できる。

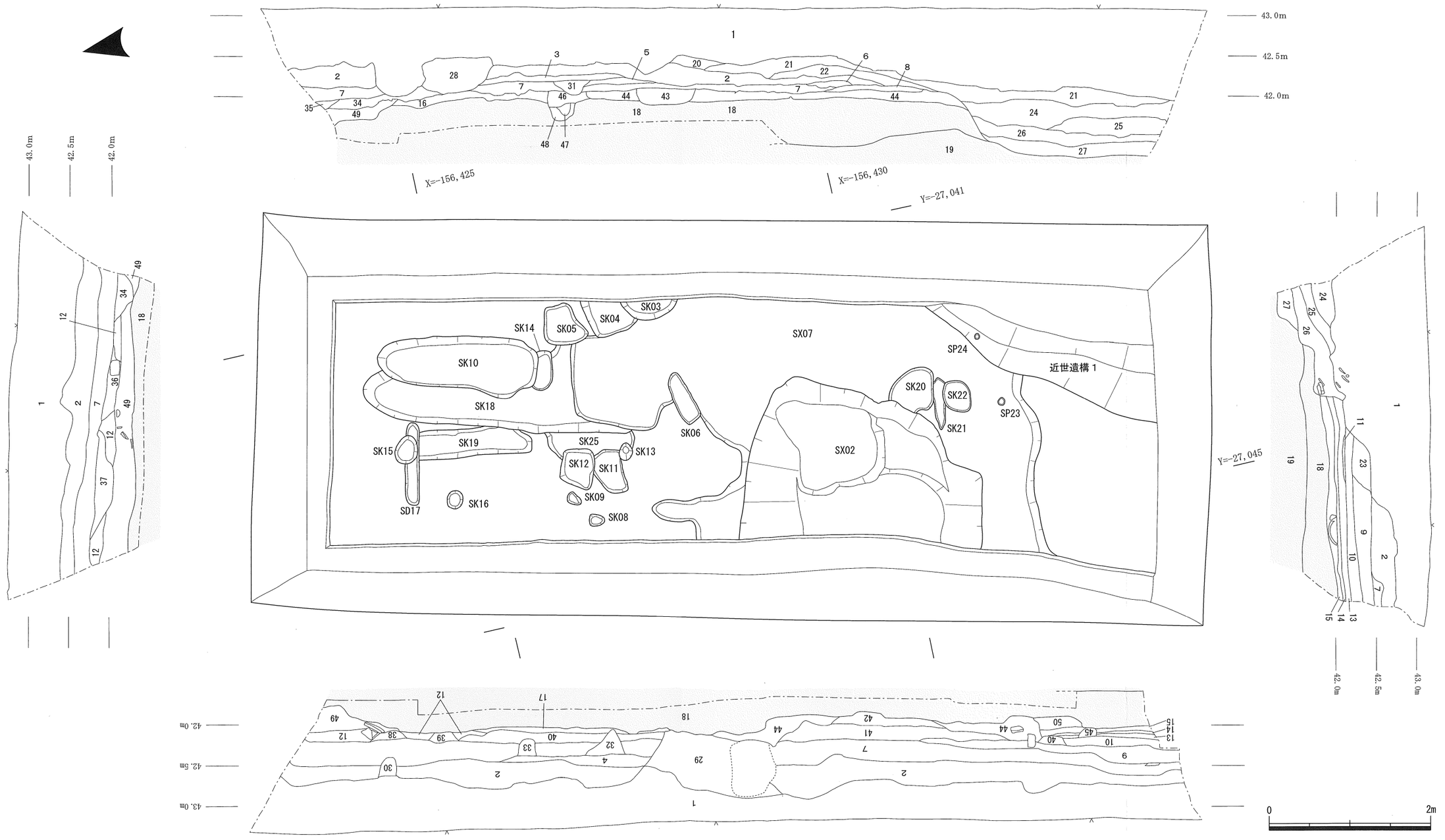
地　山　灰色シルト～細粒砂、暗灰黄色粘土（18）。標高42m付近で上面となるが調査区西側が東より20cm程高くなっている。古代の整地土とともに古代の遺構の遺構面であるためか、層上部の堆積には乱れが認められた。調査区内の古代遺構のない部分を掘削し、標高41.6m付近で灰白色シルト～粘土（19）を確認した。

２　遺構と遺物

（１）　中世遺構

ＳＸ02　調査区の中央やや南よりで検出された土坑である。南北幅は３ｍ、深さは約30cmであるが、調査区の西側へさらに広がるので規模は不明である。埋土は上層が暗灰黄色のシルト～粘土混じり細粒砂（41）、下層が灰オリーブ色粘土（42）である。埋土に炭が含まれ、古代～中世瓦、土師器、瓦器、瓦質土器が出土している。瓦はコンテナ６箱、土器類はコンテナ３箱を数え、土器類はそのほとんどが土師器皿、瓦器椀で小さな破片となっており、総個体数を把握することはできなかった。出土した土師器皿、瓦器椀から14～15世紀に形成された遺構で瓦、土器を廃棄したものと考えられる。

１～12は土師器皿である。出土した土師器皿の色調は１～８、10の10YR7/3にぶい黄橙色、９の2.5Y7/3浅黄色、11、12の10YR8/1灰白色の三種に大別できる。１、２は小形の土師皿である。底部は厚くこぶ状の粘土の塊が残り未調整である。口縁部、内面はナデである。口縁部は外傾してたちあがり、１はわずかに内湾し、２はわ



1	10YR5/8	黄褐	細粒砂～粗粒砂	近現代整地土	11	2.5Y5/3	暗灰黄	細粒砂		20	2.5Y5/3	黄褐	シルト		30	2.5Y5/2	黄褐	細粒砂混じりシルト	近世遺構	40	7.5Y5/1	灰	細粒砂混じりシルト	中世遺構
2	2.5Y5/2	暗灰黄	細粒砂混じりシルト		12	5Y5/2	灰オリーブ	細粒砂	中世整地土B	21	10YR5/3	にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト		31	5Y4/1	灰	細粒砂混じりシルト		41	2.5Y5/2	暗灰黄	シルト～粘土混じり細粒砂	ＳＸ02上層
3	2.5Y4/3	オリーブ褐	粗粒砂混じりシルト	近世整地土	13	5Y5/2	灰オリーブ	細粒砂～粗粒砂		22	10YR4/3	にぶい黄褐	粘土		32	5Y4/2	灰オリーブ	粘土		42	5Y4/2	灰オリーブ	粘土	ＳＸ02下層
4	10YR5/2	灰黄褐	粗粒砂混じりシルト		14	5Y5/2	灰オリーブ	細粒砂	古代整地土A	23	2.5Y5/4	黄褐	シルト～細粒砂		33	2.5Y4/3	オリーブ褐	細粒砂混じりシルト		43	7.5Y5/1	灰	細粒砂混じりシルト	ＳＫ03
5	2.5Y5/2	暗灰黄	シルト		15	2.5Y4/4	オリーブ褐	細粒砂混じりシルト		24	2.5Y5/3	黄褐	細粒砂混じりシルト		34	5Y5/1	灰オリーブ	細粒砂		44	5Y4/1	灰	シルト～細粒砂	ＳＸ07
6	2.5Y6/2	灰黄	シルト		16	7.5Y5/2	灰オリーブ	粘土	古代整地土B	25	5Y5/2	灰オリーブ	シルト～細粒砂	近世遺構1	35	5Y5/2	灰オリーブ	細粒砂～粗粒砂		45	7.5Y5/1	灰	シルト～粗粒砂	中世遺構
7	2.5Y4/3	オリーブ褐	シルト混じり細粒砂～粗粒砂	中世整地土A	17	10Y5/1	灰	細粒砂混じりシルト		26	7.5Y5/1	灰	粘土混じり細粒砂		36	5Y5/2	灰オリーブ	シルト	中世遺構	46	10YR4/6	褐	細粒砂混じりシルト	
8	2.5Y5/2	暗灰黄	細粒砂混じりシルト		18	10Y5/1	灰	シルト～細粒砂		27	5Y5/2	灰オリーブ	粗粒砂混じり粘土		37	7.5Y4/1	灰	細粒砂～粗粒砂		47	2.5Y5/2	灰オリーブ	シルト～細粒砂	古代遺構
9	2.5Y4/2	暗灰黄	細粒砂混じりシルト			2.5Y5/2	暗灰黄	粘土	地山	28	5Y4/2	灰オリーブ	シルト	近世遺構	38	2.5Y5/2	暗灰黄	細粒砂混じりシルト		48	5Y4/4	灰オリーブ	シルト混じり細粒砂	
10	7.5Y5/2	灰オリーブ	粘土混じり細粒砂	中世整地土B	19	2.5Y7/1	灰白	粘土～シルト		29	5Y4/2	灰オリーブ	細粒砂混じりシルト	近世遺構2	39	10YR4/1	褐灰	粗粒砂混じりシルト		49	10Y5/1	灰	細粒砂～粗粒砂	ＳＤ01

図４　中世遺構平面図・土層断面図（1/50）

ずかに外反する。３～10はヘソ皿である。３は口径8.1cm、器高1.3cm。底部外面には指圧痕があり、口縁部、内面はナデである。５は口径9.2cm、器高1.5cm。口縁部は肥厚し、外面に明瞭な段がある。内面と底部外面には煤の付着があり、灯明皿として使用されたものだろう。９は口径9.5cm、器高2.2cm。底部外面は指圧で成形し、その他はナデである。口縁部はわずかに外反する。10は長軸9.3cm、短軸8.8cm、器高2.2cmでやや楕円形にゆがんだ形状である。１～10はいずれも底部内面の周縁につよいナデを施している。11、12は口径約10cmに復元できる。器壁は薄く厚さ３㎜である。底部外面は指圧ののちナデ、体部外面にはナデによりかすかな段がつくられている。内面はナデ。口縁部は外傾してたちあがり、端部はわずかに内湾している。13～15は瓦器椀である。口縁部のみに燻しがかかった製品である。13は口径8.2cm、器高3.5cm。内面には渦巻状暗文が施されている。14は口径8.4cm、器高3.8cmに復元でき、体部外面下半には指圧痕がある。口縁部、内面はナデ。渦巻状暗文が施される。15は口径8.6cm、器高3.6cmに復元でき、外面下半は指圧痕が残り、ナデでしあげる。16は瓦当面に珠文、×、＊文様が施される幾何学文軒平瓦である。

ＳＸ07　ＳＸ07は不整形の土坑である。南北は最も広い所で5.5ｍ、東西は調査区外にさらに広がっており、その規模は確認できなかった。深さは浅い部分で11cm、深い部分で30cmである。埋土は灰色シルト～細粒砂(44)である。この遺構の中心にＳＸ02が存在していることから、２つの遺構は一連のものである可能性があるが、ＳＸ02にくらべその埋土に炭を多く含んでいること、西壁でみることのできる遺構の断面が新たに掘り込まれた形状を呈するので別遺構と判断する。古代～中世瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器が出土しているが土器類は小片が多く図示できるものが少ない。出土した遺物はＳＸ02にくらべて古い様相を示すものもあるが土師器ヘソ皿、渦巻状暗文をもち高台のある瓦器椀が出土していることからＳＸ02にわずかに先行する遺構と考えられる。

17～19は土師器ヘソ皿である。17は口径7.5cm、器高1.3cm、色調が2.5Y7/3浅黄色である。内面と口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものであろう。18は口径7.6cm、器高1.4cm、色調が10YR7/3にぶい黄橙色である。体部外面には指圧痕があり、口縁部、内面はナデである。19は口径9.9cm、器高2.1cm、色調が2.5Y8/2灰白色である。底部は指圧により成形、口縁部はナデでしあげ外反させたのち内湾ぎみにたちあげる。20は単弁蓮華文軒丸瓦の破片である。色調はN4/灰色。外縁部の断面形はかまぼこ形で内区の蓮華文との間に沈線がめぐる。丸瓦との接合面で剥離している。21は軒丸瓦の中房部分の破片である。瓦当の厚さは3.0cm、色調は5Y7/1灰白色で摩滅が激しい。

ＳＫ03　調査区の東壁にかかる位置で検出した土坑である。南北幅80cm、深さ20cm。平面形は円形となるであろう。埋土は灰色細粒砂混じりシルト（43）で遺構の底に炭が薄層となって堆積している。古代瓦、土師器、黒色土器が出土している。

ＳＫ10　長軸171cm、短軸66cm、深さ11cmの楕円形の土坑である。埋土は5Y5/2灰オリーブ色細粒砂で、古代瓦、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器が出土している。

22は均整唐草文軒平瓦である。色調は5Y7/1灰白色。瓦当は上端を欠くが下外区のみに珠点をもつものである。薬井遺跡の採集品、達磨寺出土遺物に同文様のものがある。顎の形態は曲線顎で凹凸面ともケズリである。

ＳＫ18　ＳＫ18は長軸327cm以上、短軸120cm、深さ10cmの楕円形の土坑でＳＸ07、ＳＫ10などにきられている。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂で古代～中世瓦、土師器が出土している。23は軒平瓦である。瓦当部分が欠けており文様は不明である。色調はN5/灰白色。凹面は縦、斜め方向のケズリ、凸面は縦方向のケズリである。24は玉縁丸瓦である。全長37.8cm、胴部最大幅15.9cm、胴部最大高7.4cm、厚さ３cmである。凸面は色調が2.5Y7/2灰黄色で胴部はナデが施されているがうすく縄叩きの痕跡が残っている。縄叩きは玉縁部にも施され、胴部との接合部分にはナデが施される。凹面は色調が5YR4/6赤褐色で全体に縦７本/cm、横９本/cmの布目痕があり、胴部上半、玉縁部にかけて布袋を絞った痕跡が残っている。側面は玉縁部から胴部まで通して面取りをし

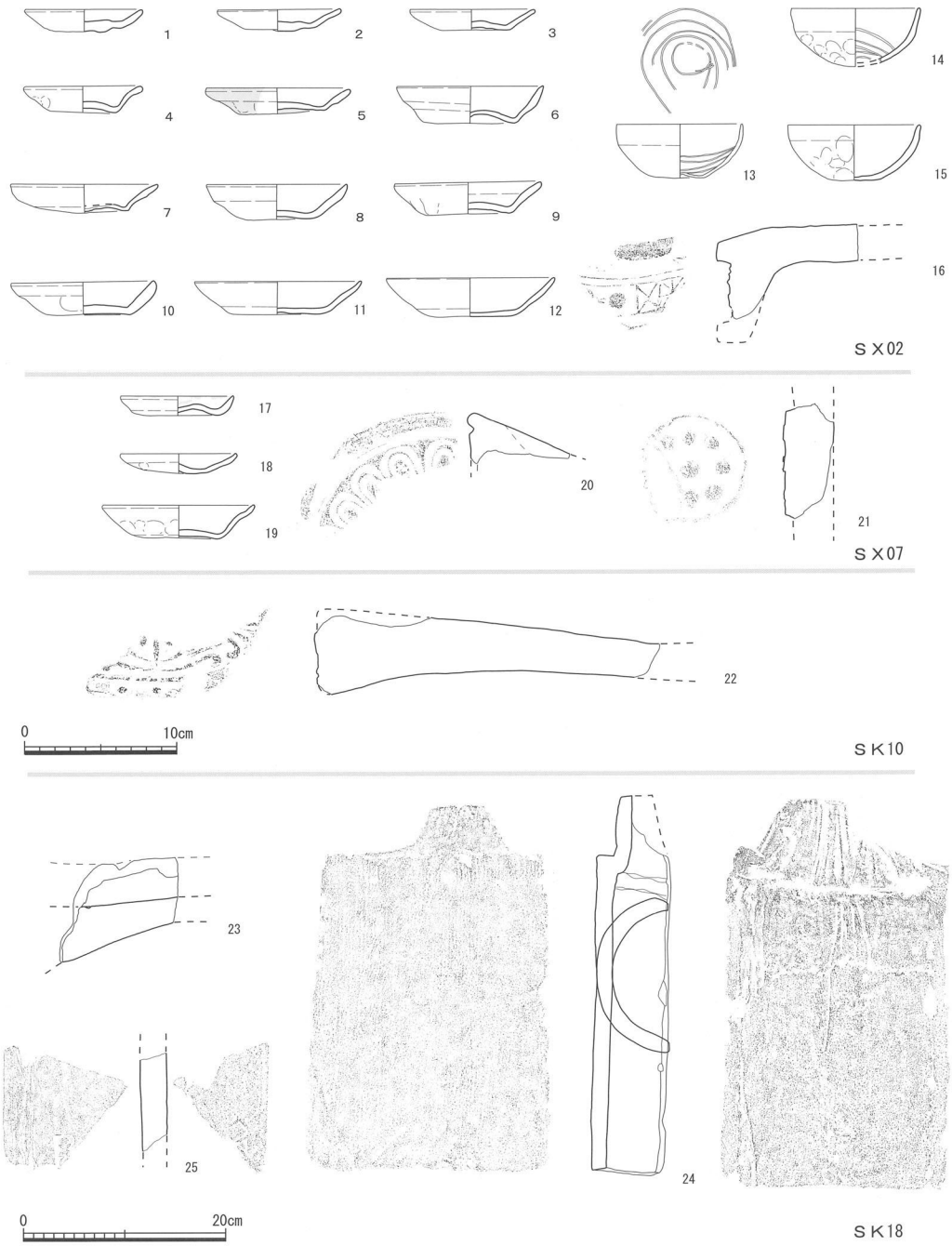


図５　中世遺構出土遺物実測図（１～22：1/4、23～25：1/6）

ている。25は平瓦で色調は2.5Y6/1黄灰色である。凹面には布目痕をナデで丁寧に消したのちに五輪塔の刻印が施されている。凸面には斜格子叩きがあり、離れ砂が使用されている。

（２）　古代遺構

ＳＤ01　　調査区北端で検出した東西方向にのびる溝である。溝の南岸を検出できただけで溝の幅は不明である。溝の断面は幅50cm、深さ10cmの浅いテラス状になった部分があり、そこから溝中央に向かってさらに深く

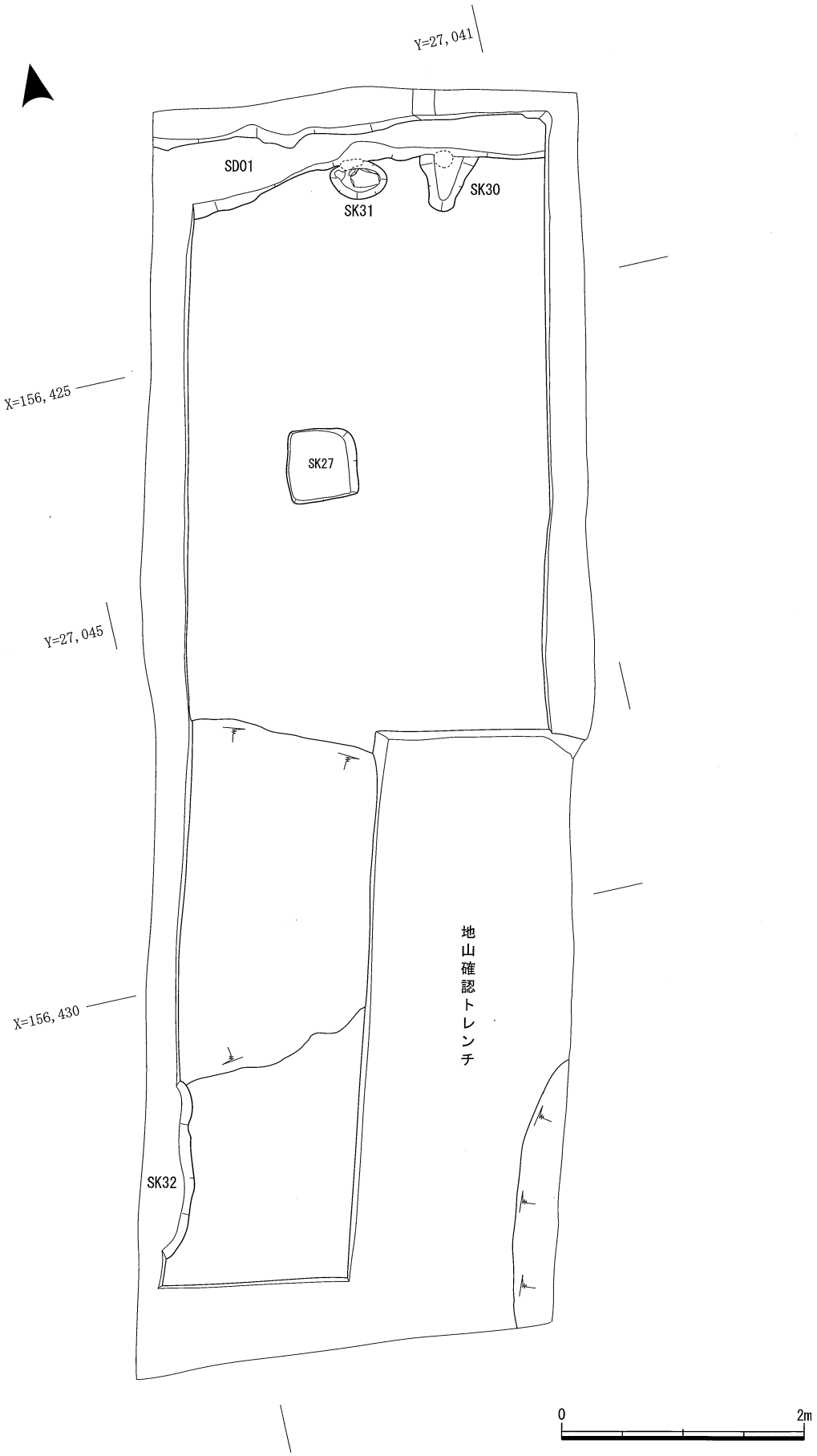


図６　古代遺構平面図（1/50）

図７　ＳＤ01遺物出土状況平面図（1/25）

なる形状である。最も深い部分で30cmを測る。溝底は地形にしたがって西から東へ傾斜して低くなっており、灰色細粒砂～粗粒砂（49）が堆積している。溝の検出段階から遺物の出土を確認することができ、図７の出土状況は遺構の上面のものである。以下の層にも遺物はまんべんなく含まれており、古代瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器が出土している。上面から出土した遺物が完形、大きい破片であることに対して遺構の下位から出土した破片は小さいものが多く、特に土器類はふるいにかけて回収するほど小さな破片となったものであった。また、出土した瓦の中には表面が炭化したものがある。古代瓦、７世紀前半から９世紀の須恵器、黒色土器が出土し、瓦器が含まれないことから、ＳＤ01は７世紀の前半から機能しており、11世紀の前半までにはその機能を失ったものと考えられる。

26、27は土師器皿である。26は全体の1/8程度の小片であるが口径13.4cm、器高2.1cmに復元できる。色調は2.5Y7/3浅黄色で、底部外面は無調整で口縁部、内面はナデ調整である。27は口径約13.5cmに復元でき、色調は2.5Y7/3浅黄色。口縁端部がわずかにつまみあげられている。28～32は須恵器である。28は杯Ｇ蓋。口径10.8cm（復元）、色調はN6/灰色である。29～31は杯Ｂ蓋である。30、31は摩滅しており、器面、断面とも滑らかである。32は壺底部である。色調は10BG6/1青灰色で底径は7.8cmに復元できる。底面には糸切り痕がある。33、34は単弁蓮華文軒丸瓦である。33は色調が5Y6/1灰色で瓦当径は18.6cmに復元でき、瓦当の厚さは２cmである。外縁部の断面形状はかまぼこ形で、内区との間に幅１cmの沈線がある。瓦当裏面はナデ調整である。34は色調が

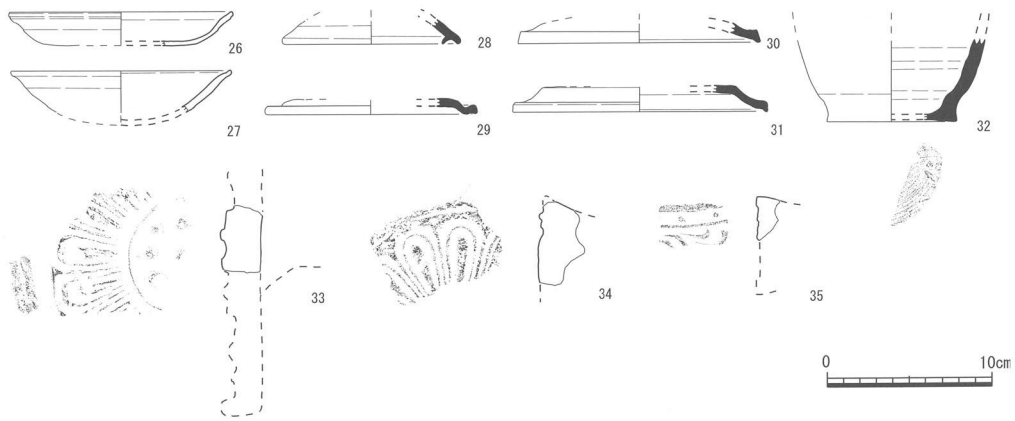
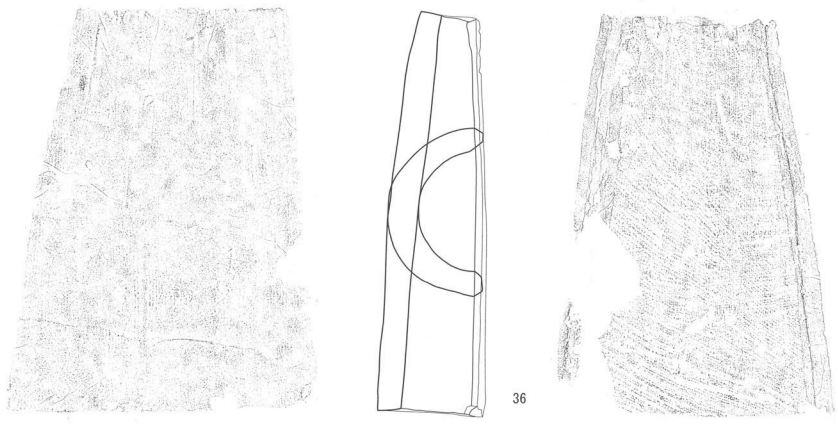
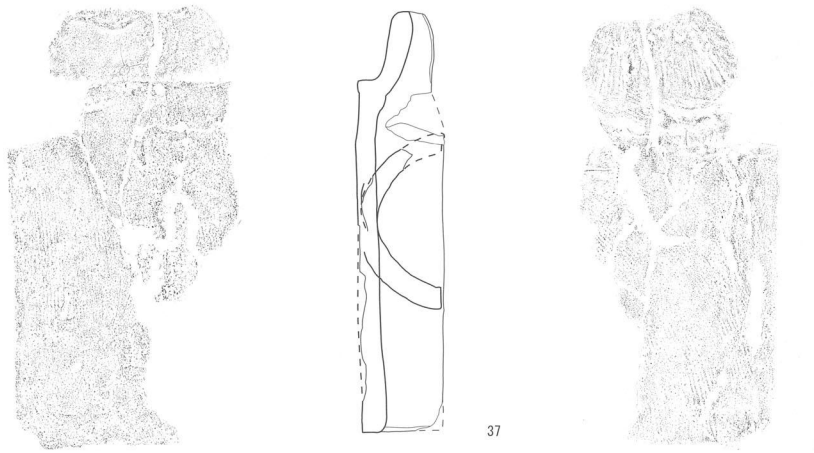


図８　ＳＤ01出土遺物実測図（1/4）





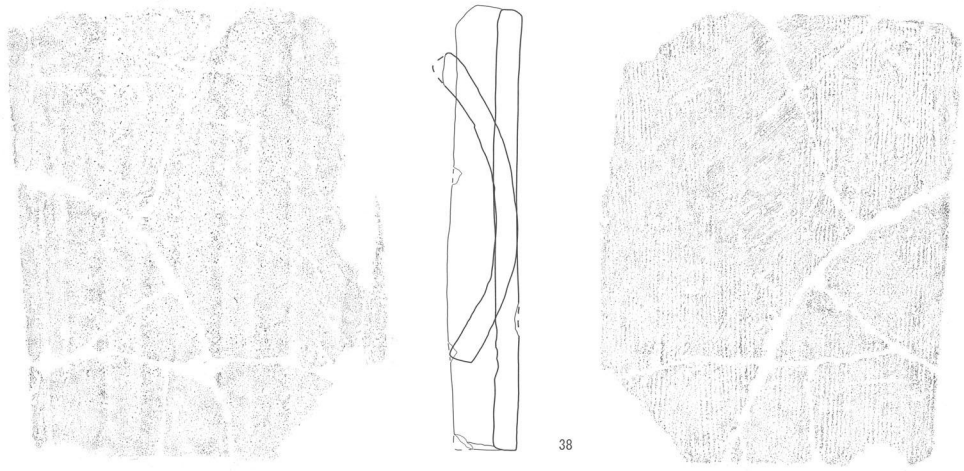


図９　ＳＤ01出土遺物実測図（1/6）

2.5Y5/1黄灰色で丸瓦との接合部分で剥離している。外縁部は平坦である。35は均整唐草文軒平瓦の瓦当の一部が剥離したもので、色調はN5/灰色である。36は行基丸瓦で全長37.4cm、広端幅13.0cm、狭端幅17.6cm、最大高10.0cm、厚さ2.8cmである。色調はN6/灰色で焼成は良好である。凸面はナデでしあげられているが、部分的に縄叩きの跡が残っている。凹面には糸切り痕と縦横６本/cmの布目痕がある。側面の面取りは凹凸両面からおこなっており、狭端面、広端面はナデ調整である。37は全長38.9cm、玉縁長6.4cm、胴部長32.5cm、胴部幅15.5cm（復元）、胴部高6.9cm、厚さ1.7cmの玉縁丸瓦である。色調は7.5YR6/1灰色で焼成は軟質である。胴部凸面には摩滅のためはっきりしないが縄叩きがあり、玉縁部はヨコナデである。胴部凹面には糸切り痕と布目が微細な布目痕があり、玉縁部と接合部には指圧痕がある。玉縁部には布袋の絞り痕がある。胴部側面の面取りはない。38は全長36.5cm、広端幅30.5cm（復元）、狭端幅26.3cm（復元）、厚さ2.0cmの桶巻作りの平瓦で、表面が炭化している。凹面の摩滅は激しいが枠板痕と縦横７本/cmの布目痕があり、凸面は縄叩きである。

ＳＫ27　一辺60cm、深さ25cmを測る方形の土坑である。埋土は2.5Y5/3黄褐色シルト、2.5Y4/4オリーブ褐色シルトである。その形状から掘立柱を想定し、柱痕跡の検出につとめたが確認することができなかった。縄叩き、布目痕のある古代瓦が出土している。

ＳＫ30　ＳＤ01にきられる東西幅40cm、深さ８cmの土坑である。埋土は2.5Y4/3オリーブ褐色シルトで、行基丸瓦と土師器が出土している。

ＳＫ31　長軸58cm、短軸30cm、深さ14cmを測る楕円形の土坑である。ＳＤ01とのきりあい関係は、木の根の影響で確認できなかった。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂で、縄叩きのある古代瓦、土師器、須恵器が出土した。

（３）　その他の遺物

古代整地土Ａ　39は土師器甕で調査区南端に堆積する灰オリーブ細粒砂～粗粒砂（14）から出土した。口縁端部が欠けているが、口径は26.4cmに復元でき、外面はハケメ、内面はヨコナデ、指圧痕があり、肩部外面と内面全体に炭化物が付着している。色調は2.5Y8/1灰白色である。40は桶巻作りの平瓦である。南壁のオリーブ褐色細粒砂混じりシルト（15）から出土した。色調はN7/灰白色で広端幅は32.0cmに復元でき、断面位置での厚さは1.7cmである。凹面には糸切り痕と枠板痕があり、中央には広端から狭端にむけ

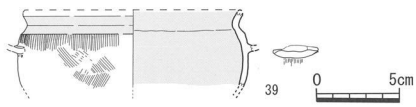


図10　古代整地土Ａ出土遺物実測図（1/4）

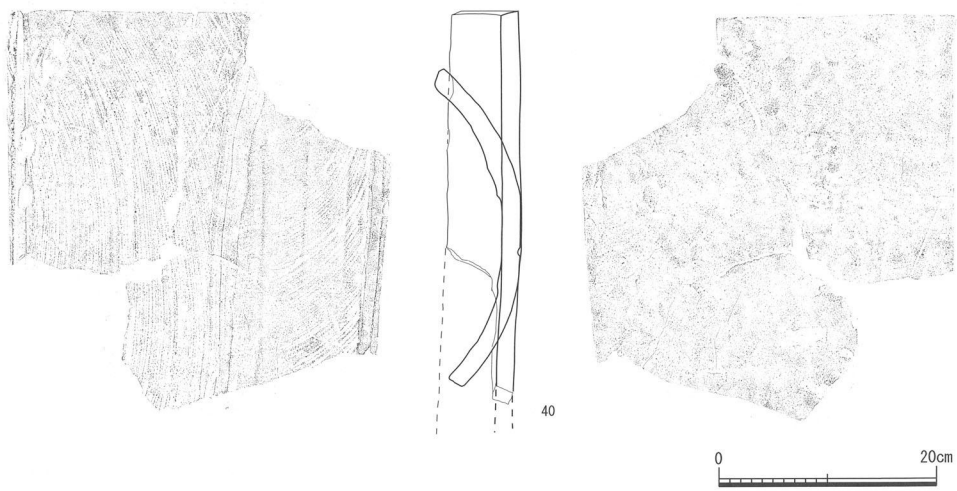


図11　古代整地土Ａ出土遺物実測図（1/6）

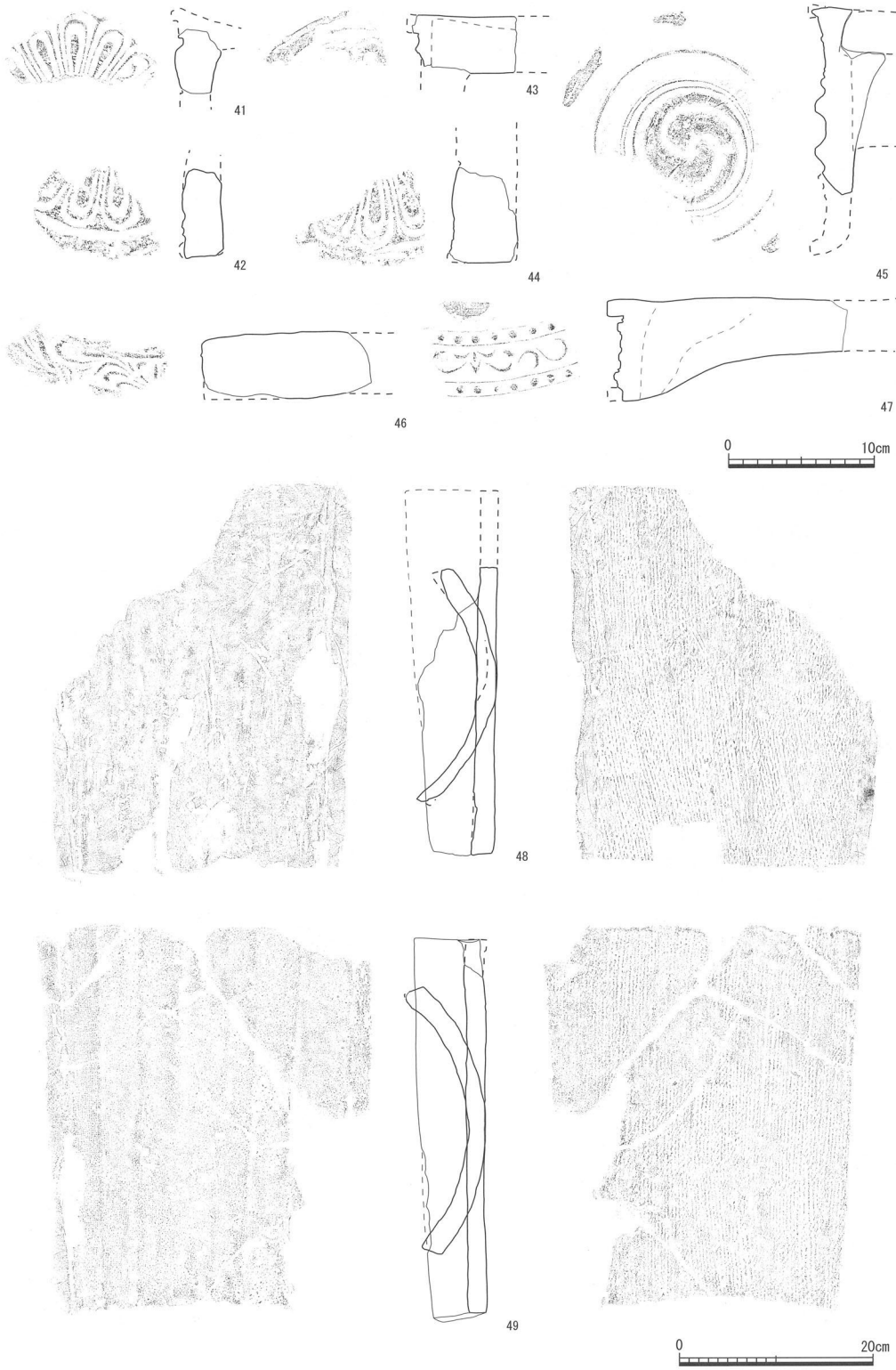


図12　中近世整地土・近世遺構出土遺物実測図（1/4・1/6）

て幅2.5～3.0cmのナデが施されている。側面は凹面から分割截線を入れており、右側面の凸面側には面取りがあり、左側面の破断面は未調整である。凸面は全面ナデである。

中近世整地土・近世遺構　機械掘削をおこなった中近世整地土と近世遺構からは多量の瓦が出土している。その量はコンテナ30箱を数える。その中から軒瓦と復元できた平瓦を報告する。41～44は片岡王寺の所用瓦と考えられる単弁蓮華文軒丸瓦である。41は近世遺構１から出土し、色調は5B5/1青灰色である。丸瓦との接合面はナデで、その接合面で剥離している。42～45は中近世整地土層から出土した。42の色調はN6/灰色。外縁部の断面形状はかまぼこ形で内区との間に沈線がめぐる。43は色調が2.5Y7/1灰白色で外縁部の断面形状は突出し平坦である。丸瓦の先端が深く瓦当に入り込んだ形で接合されており、丸瓦部の凹面には布目痕がある。44の色調は5Y7/2灰白色で表面が摩滅している。外縁部の断面形状はわずかに盛り上がるだけで明確な突出はない。瓦当部の厚さは4.3cmを測る。45は右巻きの二巴文軒丸瓦、色調は2.5Y5/3黄褐色である。巴文の頭部は断面で0.8cm突出しており、巴文の外側には内圏線と外圏線があり珠文帯を形作るが珠文はない。瓦当裏と丸瓦の接合部で剥離しており、接合に際してはナデを施すだけである。

46は中近世整地土から出土した均整唐草文軒平瓦である。色調は2.5Y8/1灰白色で摩滅しているため軟質な印象を受ける。上外区のみに珠文帯がある。47は均整唐草文軒平瓦である。近世遺構２からの出土である。瓦当部の断面は段顎で平瓦部凹凸面ともナデでしあげられている。興福寺の北円堂所用瓦と同文様である。48、49は桶巻作りの平瓦である。48の法量は全長39.0cm、広端幅27.7cm（復元）、狭端幅23.5cm、厚さ1.9cm。色調はN3/暗灰色である。凸面には全面に縄叩きがあり、部分的にナデ、布目痕がある。凹面には縦横７本/cmの布目痕がある。この瓦の中央部分は粘土の接合部にあたっており、その部分にはナデが施され布目痕が消えている。49は全長38.6cm、広端幅28.2cm（復元）、狭端幅26.2cm（復元）、厚さ1.8cmである。表面は炭化しており、凸面には縄叩き、凹面は枠板痕と縦横７本/cmの布目痕がある。

３　まとめ

今回の調査では、おもに古代の整地土と溝、中世の整地土と廃棄土坑を検出した。これらの遺構は片岡王寺との関わりをもつ遺構である。

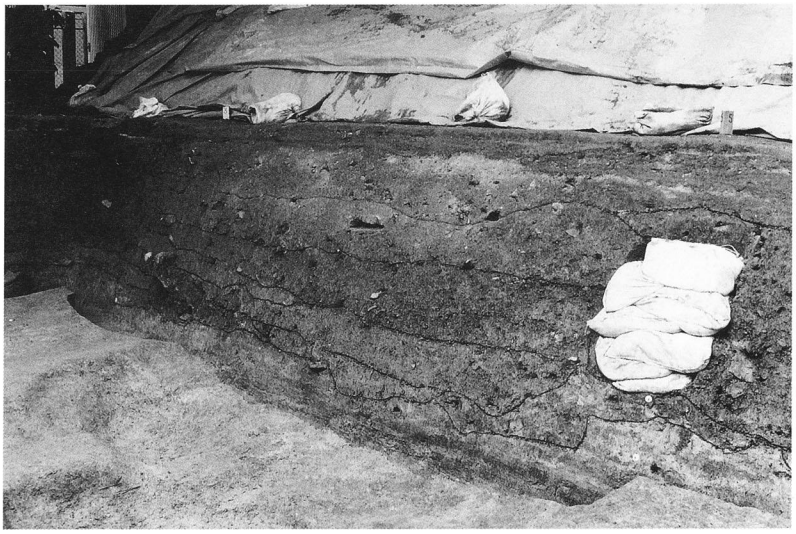
古代の溝（ＳＤ01）は、その出土遺物から７世紀前半から11世紀前半まで機能した溝と考えられる。したがって、それ以前に形成された調査区北半の古代整地土Ｂは、遺物の出土はないものの片岡王寺の創建時期に形成された可能性もある。また、溝の廃絶期とみられる11世紀前半は、『放光寺古今縁起』に記載される永承元年（1046）の落雷によって金堂、回廊、東大門が炎上焼失する時期と重なるものである。溝から炭化した瓦が出土することから、火災が原因となり衰退する片岡王寺とともに溝の機能も終焉を迎えたものと考えられる。

中世整地土ＢはＳＤ01が埋没したのちに形成されている。中世整地土Ｂは部分的な堆積ではあるが、瓦器が出土し、これを遺構面としてＳＸ02、07をはじめとする中世遺構が形成される。ＳＸ02、07はいずれも古代～中世瓦、土師器皿を多量に出土し、その埋土に炭を多く含むことから廃棄土坑と考えられ、その形成時期は14～15世紀におさえることができた。この時期は実誉による『放光寺古今縁起』の奥書に記載される復興の記録に沿うものであり、この復興の記事を裏付けるものといえる。平成16年（2004）に今回の調査地の北東でおこなった片岡王寺跡２次調査では12世紀後葉から13世紀中葉の廃棄土坑とそれに続く中世の整地土、遺構が検出されており、今回の調査成果とあわせて片岡王寺の復興活動が継続されていることを考古学的にも確認したものといえる。

検出した遺構と『放光寺古今縁起』の記載内容が合致することが確認されたのは、今回の調査の大きな成果である。しかし、調査地が片岡王寺の中でどのような位置にあたっていたのかは把握することができなかった。片岡王寺を復元するためには、今後も継続して調査をおこなうことが必要である。

片岡神社境内（東から）

ＳＸ02完掘状況
（南西から）



ＳＸ02・07土層断面
（北東から）

中世遺構検出状況
（北東から）

ＳＫ10遺物出土状況
（南から）

ＳＫ18遺物出土状況
（北西から）

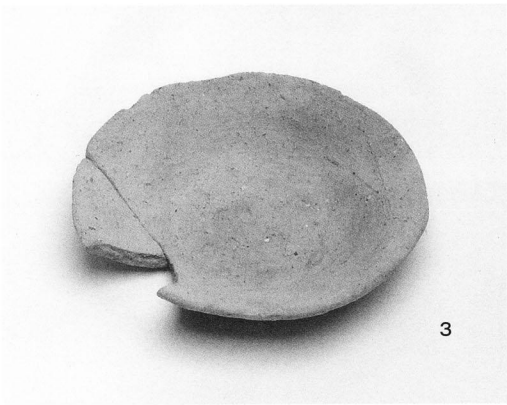
古代遺構検出状況
（北東から）

ＳＤ01遺物出土状況
（南から）

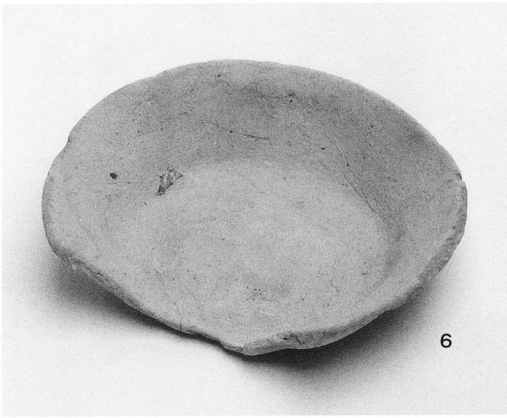
南壁土層断面
（北東から）

1

2

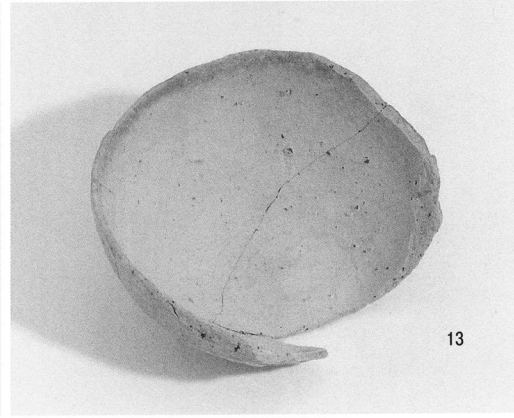

3

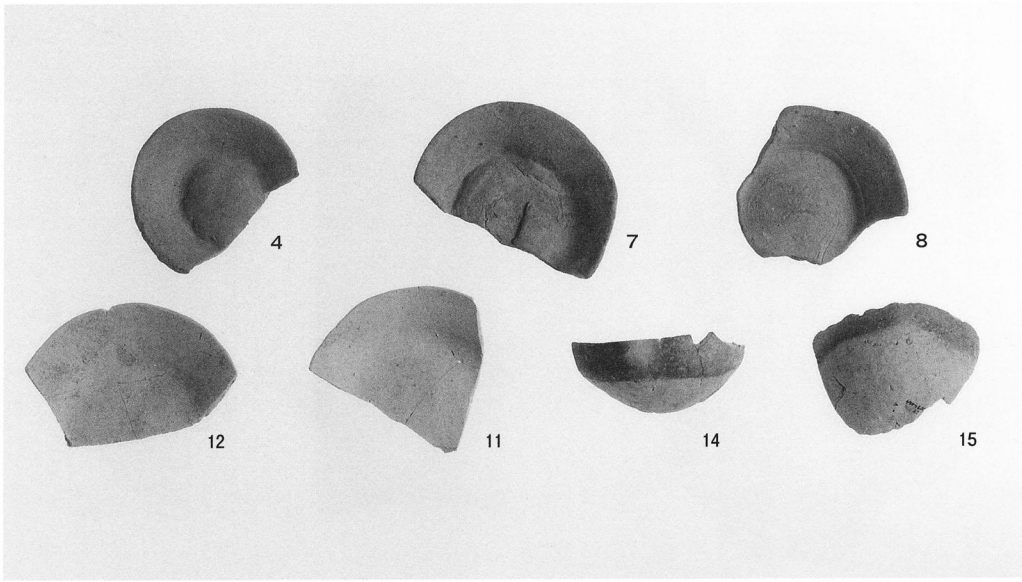
5


6

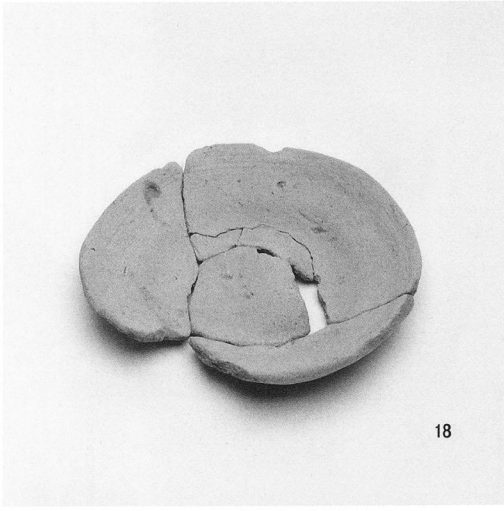
9

10

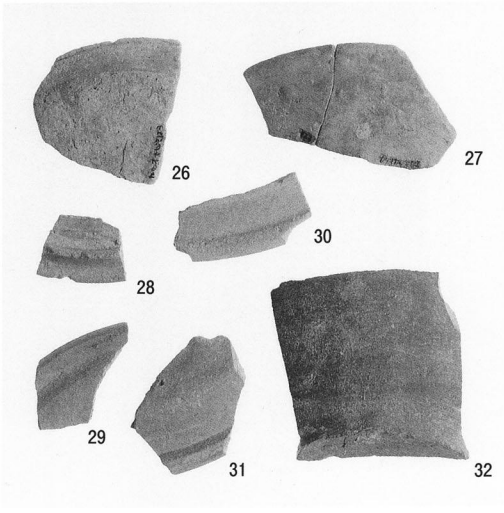

13

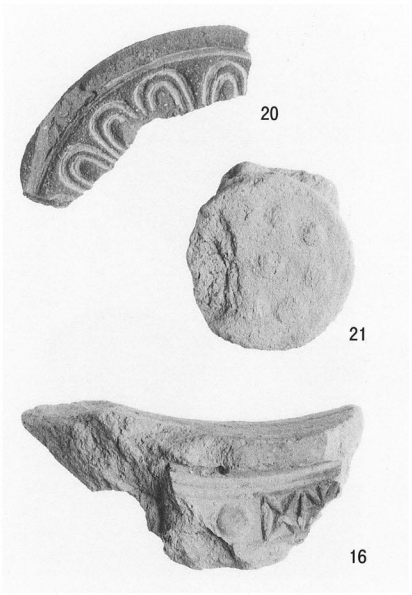

4
7
8
12
11
14
15

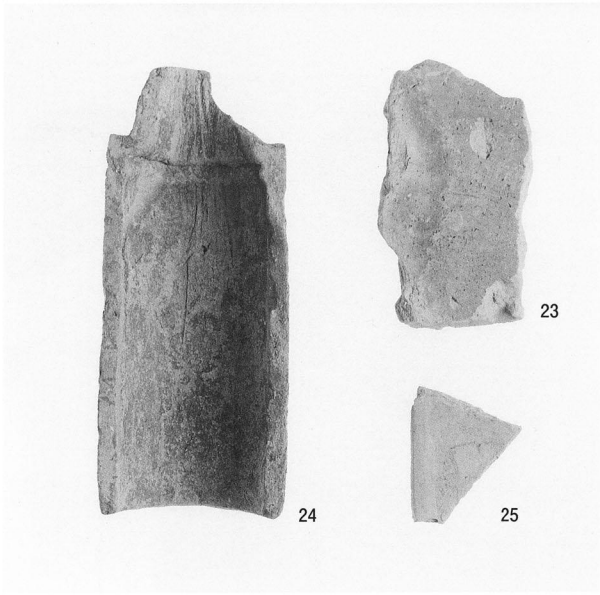
17


18

19

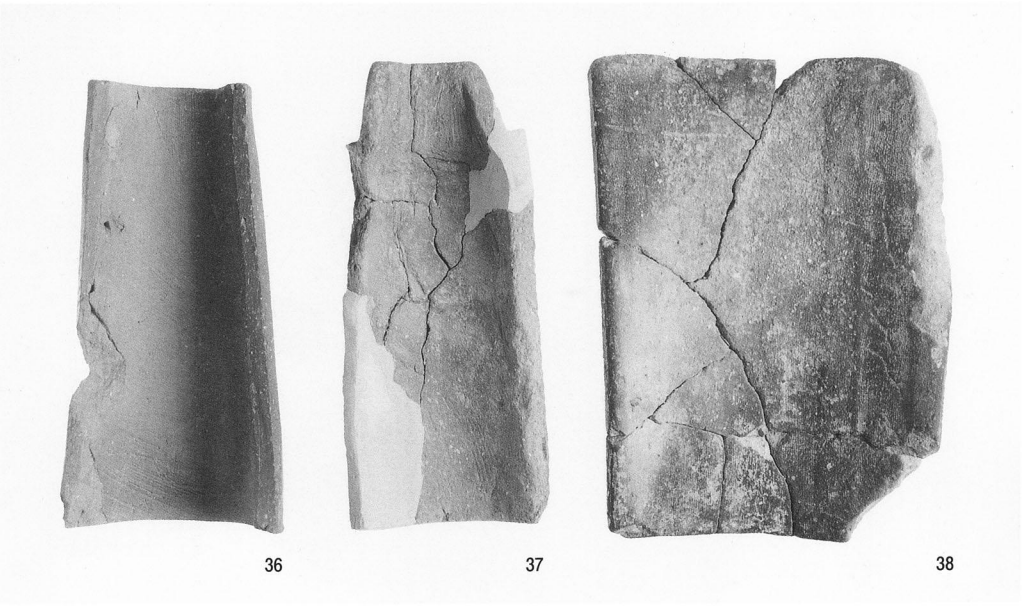

26
27
30
28
29
31
32

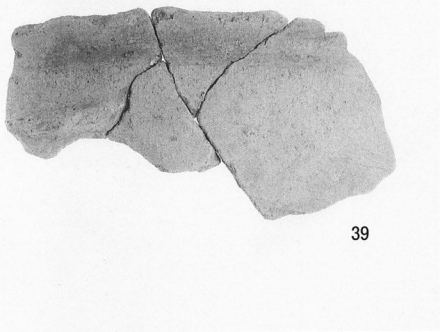

20
21
16


24
23
25

33
34
35

22


36
37
38


39

40

41

43

45

42

44

46

47

48

49

報告書抄録

ふりがな	かたおかおうじあとだいろくじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	片岡王寺跡第６次発掘調査報告書
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書
シリーズ番号	第８集
編著者名	岡島永昌、櫻井恵
編集機関	王寺町教育委員会
所在地	〒636-0002　奈良県北葛城郡王寺町王寺２丁目１番18号
発行年月日	平成20（西暦2008）年３月31日

収録遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
片岡王寺跡	奈良県 北葛城郡 王寺町 本町２丁目 1827番	29425	10Ｂ 5	34° 35′ 22″	135° 42′ 18″	2007.02.19.～03.17	60㎡	範囲確認

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
片岡王寺跡	寺院	古代 中世	溝 整地土層 廃棄土坑	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦	

片岡王寺跡第６次発掘調査報告書

王寺町文化財調査報告書　第８集

2008年３月31日

編　集　王寺町教育委員会
発　行　　奈良県北葛城郡王寺町王寺２丁目１番18号

印　刷　株式会社　明新社
奈良市南京終町３丁目464番地